

エドワード・ムンクについての一考察 ―エドワード・ムンクの人生を巡る表現―

論者はエドワード・ムンクの『叫び』を見た時に、なんとも言えない気持ちになった。その感情は、感動、驚き、といった簡単な言葉では表すことのできないものであり、この時から論者は彼の虜になり、卒論のテーマに据えて研究を進めることにした。

それを述べていくにあたって、今までのムンクをめぐる研究をふり返つてみたい。これまでの彼の研究をめぐつては、概説的な検討が一般的に進められ、また彼の西洋美術史の中での位置づけが考察の目的になつていくことが理解される。しかし、その問題についても、まだ明確な答えは提示されていないわけではなかった。

そうした研究状況のなかで、近年には、人間ムンクに注目があつまり、生と死に対するムンクの態度が論じられてきていることは留意される。なぜならば、ムンクの作品を把握するには、そのようなムンク自身に対する検討が最も必要と考えられるからである。しかし、前述したように、これまでその問題に対しても明確な答えを示す考察も、またそもそも、そうした視点からの検討自体もほとんど行われていない。

いずれにしてもムンクをめぐる研究は、まだ途上にある、

とまとめることができる。

そこで、このムンクを考察するにあたり、従来の一面的な研究評価に対して、新たなムンク像をとりだすことを、次のように試みたい。

まずは、彼の作品の中で女性を描いた作品について見ていこうと思う。具体的に《思春期》《吸血鬼》《人生の四世代》が対象になるが、この三作品からは、ムンクが今まで実際に出会った女性を通して感じられる女性の本性を検討する。

ムンクにとって女性のイメージとは、恐怖や死に値するが、しかし、その一方で、希望や生も認められる。それはまさしくムンクが今まで出会った女性の人生の現実としてとらえることができ、この三作品が、ムンクが人生で出会った女性の真の姿、死と生を持ち合わせた本性を持つ女性の姿を描いたものとして理解することができる。

次に《生命のダンス》《太陽》の作品を通して検討する。これまで、ムンクの作品には悲しみについての表現を表わした作品が多く、しかもその表現は一目見ると分かるようなものであったが、この二つの作品からは、ムンクがこれまでとは大きく異なつて、悲しみや死から、生きる喜びへ

と、ウエイトを移して、作品を描くようになったことがうかがえる。

三つ目には、最も有名な作品となっている《叫び》と《痛める子》について考える。

この時期にムンクが体験したことを振り返ると、死にながっている。すなわち、この時期に姉と母を失っているのである。ムンクにとって二人はかけがえのない存在であった。その二人が亡くなったことは、まちがいなく、ムンクにとって、大きな悲しみであり、それは死を意味するもの以外のなものでもない。

この様に、この二作品を見ると、ムンクの人生における最大の悲しみ”として確定づけることができる。

そして、最後に《窓辺にて》の作品をとりあげる。この作品は、ムンクが長年こだわってきた生と死が凝縮されており、最終的に生と死の考えを描いたものであることを考察する。

ムンクの人生の出来事を描いたこの作品は、死の恐怖や不安にさらされながらも、普通の人では考えられない境地にたたされつつも、ムンクはそこから本当の人間の姿、生きる喜びを知り、ムンク自身、現実を受け止め、それを糧にすることで、自らの人生を充実したものにしたいことを表わしていると考えられるのである。つまり《窓辺にて》では、ムンクが生への領分を見つめているということができ。それは、愛する家族の死、愛する人との出会いによっ

て人生を充実したものにすることができたことによると思われる。

したがって、この《窓辺にて》の作品は、単純にムンクが画業の最後に描いたということでは終わるものではない。そうではなく、ムンクの人生のすべてが凝縮された作品として見なされなければならない。それによって、ムンクが求めていた人生の表現が、はじめて理解できることになるからである。

以上のように本論考では、西洋近代美術史の中で、表現主義者として評価される、エドワルド・ムンクについてのさらなる表現の探究を行った。というのは、ムンクの従来への評価は、既述した様に一面的であり、ムンクの作品に対する真髓にせまったものではない。

そのため論者は、その問題に対して、代表作品をとりあげながら、特に生と死に対するムンクの考えに焦点をあてて、考察し、悲しみや死にこだわった作品を描きつづけたわけではなく、生と結びつくものであり、両者の関係を描くことが、ムンクの求める作品表現であった可能性を明らかにした。

(芸術文化学科四年)